

多摩川の名脇役

六郷領を潤し、豊かな村へと変えた

6. 「六郷用水」 (東京都大田区田園調布)

徳川家康が政策を打ち立て、その家康に優れた土木技術を認められた小泉次太夫吉次 (こいずみじだゆうよしつぐ) の手により開削された六郷用水。

用水流域は、水に乏しい村から豊かな水田になり畑へ。そしてその畑はやがて宅地へと変化していきます。

現在ほとんど埋め立てられてしまいましたが、かつては田畑を潤すのはもちろん、洗い場や飲料水として生活になくてはならない大切な用水路でした。



(左から時計回りに)

六郷用水の跡／崖線から滲み出す湧水／せせらぎを泳ぐおたまじゃくし／せせらぎに咲く水草／用水沿いの遊歩道 (写真-H16.4撮影)

天正18（1590）年、徳川家康は豊臣秀吉の命により三河国（現在の愛知県）から江戸に入府しました。

広大な関東平野を手中に収めた家康は、未開発地の多い領内に田畑を開発し、江戸近郊の農村を立て直す事が一番の急務であると考えます。

そしてその政策の一環として行われたのが、六郷用水や二ヶ領領水の開削でした。

六郷用水の通る以前の六郷領の村々は、千束の池水溜と池上西谷水溜池に頼るだけという乏しい水利状況でした。

家康はそんな六郷領を潤す用水を引くため、土木技術に優れた小泉次太夫吉次（こいずみじだゆうよしつぐ）を江戸に入府させ、六郷用水を開削させます。



世田ヶ谷、六郷、稲毛、川崎の4つの領を通過しているために「四ヶ領用水」、開削者である次太夫の名前をとり「次太夫堀」とも呼ばれた六郷用水は、多摩川の水を北多摩群和泉村（現在の狛江市和泉）で取水し、世田ヶ谷領を経て沼部、嶺を通り、鶴木村から矢口村あたりの「南北引分け」や「矢口の引分け」と呼ばれる分岐点で、「北堀」（池上、新井宿、大森方面）と「南堀」（蒲田、六郷方面）に二分されます。

そしてこの分岐点の手前、六郷用水の下沼部村から嶺村にかけての間には「女堀（おなぼり）」と呼ばれる個所があります。

「女堀」の呼び名の由来には様々な説がありますが、開削の様子をうかがわせる説としては、なるべく農業の支障にならないように婦女子に多く働いてもらったため、また男子10人に女子1人を加えて、工事中の人夫間の空気の陰悪化を防いだためという言われがあります。

大田区史にも「用水開削中の最も難工事であったのは、下沼部浅間神社の崖下と、嶺から鶴の木に入るところ、光明寺裏山の掘割であったという。その土地は高く堅くなかなか堀り進むことができなかった。そこで人でも足りなかったのが女もまじえておもしろおかしく張り合いをつけた。そこで今でも女堀という。」と記されています。

また、一般的に曲折のある堀の状態を女堀と称することが多いのでそう呼ばれているという現実的な説の一方、次太夫が多摩川からの取水口を決める際、多摩丘陵の南端部にあたる田園調布の丘（現在の多摩川台公園付近）にぶつかり頭を悩ませていたら、夢に女神が現れ「山を切り崩さずに迂回して女堀を掘りなさい」というお告げがあり、下沼部村のあたりから取水する予定を変更し、上流にある和泉村まで掘りあげ、そこを多摩川からの取水口としたという、不思議な話も残っています。

いずれにしてもこの「女堀」と呼ばれる辺は、丘陵地帯を切り通すため曲折も多く、工事に際し一番難儀した場所でもあったようです。

六郷用水の設計やかかった費用等については、資料が残っていないため明確に知ることはできませんが、この工事の手順や期間などの一端は、旧六郷領の村々に残る「新用水掘定之事」に記録が残っています。



六郷用水開削の命を受け川崎に住居を構えた次太夫は、慶長2(1597)年2月1日、六郷領内のすべての名主を集め工事内容を発表し、測量を始めます。

測量は、夜提灯をともして木に登り、その明かりで高低差や方位を測ったと言われています。

慶長4(1599)年1月9日、領内の測量を終えた次太夫は、いよいよ道塚村（現在の新蒲田）の水路から工事に着手します。

工事は、作業を行う農民たちの疲れを配慮し、同時期に始めた二ヶ領用水の開削と3ヶ月ごとの交代で行われ、落差約20m、堀幅は本流約5m、分流約2m、水路の両脇には約3.5mの土揚敷*が設けられました。

慶長14(1609)年、次太夫は、岩戸村境から和泉村川原境での本流工事のすべてを竣工させ、そこから各村の田地へ分水する小堀工事にあたります。

そして翌年2月28日、約15年という年月をかけ、全長約30km、灌漑面積は1,500ヘクタールに及び、六郷領・世田ヶ谷領の一部をあわせた50ヶ村の田地を潤す大用水が完成しました。次太夫74歳の時です。

家康は次太夫の功勞に対し、開削工事が始まってまもなく代官の地位を、また工事の終了後には家盛の刀を与え、本領750万石の他、開発した旧田新田のうち1/10の面積を与えたとも伝えられています。

こうして農民たちから用水の神様と崇められた次太夫の手によって、豊かな穀倉地帯へと変わった村々ですが、用水が引かれたことによって新たな問題も持ち上がりました。

一つは暴れ川である多摩川からの引水のため、出水の度に大量の水が流入し、度々修復が必要だったことです。

正保元(1644)年8月と翌年9月に発生した台風では、大量の水が流入した様子が「家屋到壊濁流溢れ六郷領内押開き海の如き光景（狛江市史）」と記されています。



二つ目は、用水の存在にも関わらず水不足にみまわれる事が多かった事です。

水不足の原因は、一つ目にあるような用水堀の破損などによって六郷領まで流れる水の量が減ってしまった事に加え、急速な流域の田畑の開発によって、水の使用量が増えた事にあります。

当然、それにより水争いも絶えませんでした。

享保期(1716～36年)に入ると、数々の問題を抱える六郷領村々の窮状を救うため、幕府は農政の実務家であった田中丘隅（たなかきゆうぐ）を派遣し、用水の大改修を計画します。

丘隅はまず、用水路沿いを巡って検分を行い、各村からの要望に耳を傾けます。

そして具体化した改修計画を元に、享保10年9月、南北に分かれる分岐点に両堀への流量を一定にするための水計水門を設置などの決定をします。

この用水大改修は、丘隅が享保14(1729)年12月になくなるまで続き、4年間に埴（いり）水門）12個所、悪水落とし（排水口）2個所をはじめ、多くの用水関係御普請が継続して行われました。



六郷用水の開削によって、六郷領周辺の様子は、田園から宅地へと目まぐるしく変化していきます。

「六郷用水を取り巻く流域の歴史」

- 明治初期～ 農業生産の主流が穀類から商品作物（野菜等）へと移行

- 明治5年（1872年） 官営鉄道（現在のJR）開通

- 明治34年（1901年） 京浜電気鉄道（現在の京浜急行）開通
. . . . 臨海地域を中心に多くの工場建設

- 大正5年（1916年） 大田区に玉川上水株式会社設立

- 大正7年（1918年） 田園都市株式会社創立
日本初の計画的住宅専用市街とし田園調布の住宅街の分譲が行われる

- 大正8年（1919年） 大森・入新井地区に給水開始

- 大正11年（1922年） 目蒲線（現在の東急多摩川線・目黒線）開通 以後東急各線開通

- 大正12年（1923年） 関東大震災
— 多くの作家や画家が集住し「馬込文士村」と称されるようになる

- 昭和2年（1927年） 矢口村水道組合設立

- 昭和6年（1931年） 矢口村1,500戸等に給水開始
. . . . 六郷用水取水口付近に日本水道狛江浄水場建設
— 世田ヶ谷町・駒沢町一円およそ2万ヘクタール10万人に給水開始
. . . . 東京市は、衛生上の理由から農業用水、河川水の飲用等、生活水としての利用を中止するように指導 流域各地の物洗場等が次々と姿を消す

- 昭和14年（1939年） 第二次世界大戦勃発

昭和20年(1945年) 終戦

- － 高度経済成長期の東京とその周辺の大田区・世田ヶ谷区に人口が集中し、農地・農用地は次々と宅地化
 - ・ 狛江市和泉の取水口は破却され用水組合解散
-

こうして開削から300年以上にわたり六郷領一帯を潤し、生活になくってはならない水として利用されてきた六郷用水ですが、次々と埋め立てられ姿を消していきました。

現在、大田区が整備している六郷用水の跡には、湧水からなるせせらぎが流れ、当時の姿を偲ぶ事ができます。

* 土揚敷（どあげしき） 用水の底の土をさらった際に出る土を置いておくスペース